

目的 茶柱が立つと縁起が良いという。茶浸出液中に茶軸が立ったものが茶柱であり、その稀少価値ゆえに珍重される。この茶柱について形態的に検討したので報告する。

方法 試料には市販のかりがね茶と焙じ茶を用い、通常の淹茶法によって出来た茶柱を採取した。茶軸の外部及び内部の形態と「茶柱」との関連を探るために、まず茶柱の外部構造を实体顕微鏡で観察し、形態的に群別した。内部構造は茶軸の横断面の切片を調製し、光学顕微鏡で比較観察をおこなった。

結果 茶柱として姿勢制御されている茶軸を採取し、外見上群別すると形態的に共通点が認められた。次に内部組織を観察すると髓の占める割合が大きく、即ち茶柱が若い枝であることを示している。一方、かりがね茶の茶軸で茶柱になり得ない(単に浮かない場合も含む)ものは、組織上分化が進み、それだけ髓の占める割合が小さくなっている。また、焙じ茶は茶柱が出来にくい。焙じ茶に湯を注ぐと湯中に細かい気泡を発生するが、かりがね茶ではほとんど発生しない。

以上のことから、おそらく茶軸は髓の部分に空気を留保することによって浮くと考えられる。したがって髓の占める割合の大きい若い枝ほど、組織中の留保空気量が多くあって浮き易いのであろう。焙じ茶の茶軸は内部組織が強く破壊されているので、空気を湯中に散逸してしまい茶柱になり得ないのであろう。

さらに、茶軸が単に浮かただけでなく茶柱として立つための要因の一つとして、茶軸内部における気泡の分布・位置なども無視出来ない。